

日本の地域共有手話における数詞とタイムライン：愛媛県大島の宮窪手話

矢野羽衣子（筑波技術大学大学院）・松岡和美（慶應義塾大学）

Sign Language Studies, Volume 18, Number 4, Summer 2018, pp. 640–665
Published by Gallaudet University Press

日本語訳作成：安達そら・蓮池通子・松岡和美・矢野羽衣子

翻訳監修：矢野羽衣子・松岡和美

※この日本語訳は、著作権者の許可を得て公開しています。引用の際には、下記の情報を明記してください。

引用情報：

矢野羽衣子・松岡和美. 2018. 「日本の地域共有手話における数詞とタイムライン：愛媛県大島の宮窪手話」. 『Sign Language Studies』 18:4号. 640–665ページ. 原著 DOI: 10.1353/sls.2018.0019 著者による日本語訳
<http://www.uikoyano.com/>

要旨：本研究は、西日本に位置する愛媛県大島の地域共有手話である宮窪手話の記録を目的とする継続中の取り組みである。宮窪手話の社会的・地理的・文化的な概説の後、宮窪手話の数の表現とタイムラインについて論じる。日本手話の数詞との比較から、宮窪手話と日本手話の違いは単なる語彙的な差異を越えたものであることが明らかとなった。それに加えて宮窪手話は、話者の身体を基点として使用するタイムラインと太陽の動きを基にした天体タイムラインの2種のタイムラインが同一の言語に存在するという新しい知見をもたらす事例である。

手話類型学の分野における手話の体系的な比較は、過去10年ほどの間で顕著な発展を見せ（パーニス Perniss et al 2007 など）、特に地域共有手話の研究はこの分野に大いに貢献できることが徐々に明らかになっている（デボスとデシャン de Vos and Zeshan 2012; ゼシャンほか Zeshan et al. 2013）。地域共有手話（村落手話やへき地手話とも呼ばれる）とは、聴者よりろう者の比率が高

いコミュニティで出現し、そのコミュニティのろう者と聴者の両方に共有されている言語を指す(ゼシャンとデボス Zeshan and de Vos 2012; ナイスト Nyst 2012)。地域共有手話に関する先行研究としては、カクマス Kakumasu (1968)、クッシュェル Kuschel (1973)、ウォシャバウ Washabaugh et al. (1978)、およびグロース Groce (1985)などが挙げられる。その後も、インドネシアのカタコロク(Kata Kolok) (ブランソンほか Branson et al. 1996; デボス de Vos 2012)や、メキシコ、インド、トルコの手話言語(ゼシャンほか Zeshan et al 2013)、イスラエルのアルサイドベドウィン手話(サンドラーほか Sandler et al. 2005, 2011)など、数多くの地域共有手話が報告されてきた。地域共有手話の多くが消滅の危機に瀕しており、よってそれらを記録することはきわめて重要である。

本研究は、西日本に位置する愛媛県大島の地域共有手話である宮窪手話の記録を目的とする継続中の取り組みである(矢野と松岡 Yano and Matsuoka 2016, 2017a, 2017b)。本稿では、手話類型論の分野で活発に研究されている、数の表現とタイムラインの2つのトピックを取り上げる。このトピックに注目することで、先行研究で取り上げられた他の手話言語と宮窪手話を直接的に比較することが可能となる。また、数詞のシステムとタイムラインの比較により、宮窪手話と日本手話の違いが単なる語彙的な差異を越えたものであることが明確になった。言語学的な記述の前に、宮窪手話の社会的・地理的・文化的な概説を述べる。

背景的情報

日本のろう者コミュニティで広く使用されている日本手話は、出生時から日本手話で養育される母語話者によって習得され使用されている言語を指す(市田 Ichida 2010; 岡・赤堀 Oka and Akahori 2011; 松岡 Matsuoka 2015)。日本手話の母語話者数に関して確立した統計データはないが、その数は約3万5000~5万7000人、つまり日本のろう・難聴者の約10~17%を占めると推測される(市田ほか Ichida et al. 2001; 神田ほか Kanda et al. 2008)。難聴者が主導権を持つ団体組織によって手指日本語の政治的優位性が長い間維持されてきたこともおそらく関係していると思われるが、日本手話は日本社会において公的には認知されていない。それでも、母語話者と母語話者に近い言語的直感を持つ話者たちは、都市部で日本手話の研究や推進のための団体を設立している。日本の国営テレビ放送局(NHK)は、母語話者と母語話者に近い言語的直感を持つろうのキャスターが日本手話でニュースを伝える番組を毎日放映しており、日本手話の社会的認知度の向上に貢献している。日本手話に関するより詳細な社会言語学的な記述については、相良 Sagara(2014)を参照されたい。日本手話の他に

も、小さなコミュニティでは地域共有手話が使われているが、これまでに研究されたのは、その文法的な性質のごく一部にすぎない。例えば、大杉ほか Osugi et al. (1999) は、鹿児島県の奄美大島で使用されているものを「身振りコミュニケーション」とし(109 ページ)、その研究を行った。大杉らは25の基本単語の手話表現を収集し、ある1家族のホームサインが近隣に広がっていったことを示した。

宮窪手話(矢野と松岡 Yano and Matsuoka 2016 の研究では愛媛県大島手話とされたもの)は、西日本に位置する愛媛県今治市の限られた地区で使用されている。大杉ほか調査を行った奄美大島と愛媛県大島の位置関係を図1に示す。



図1 奄美大島と宮窪の位置

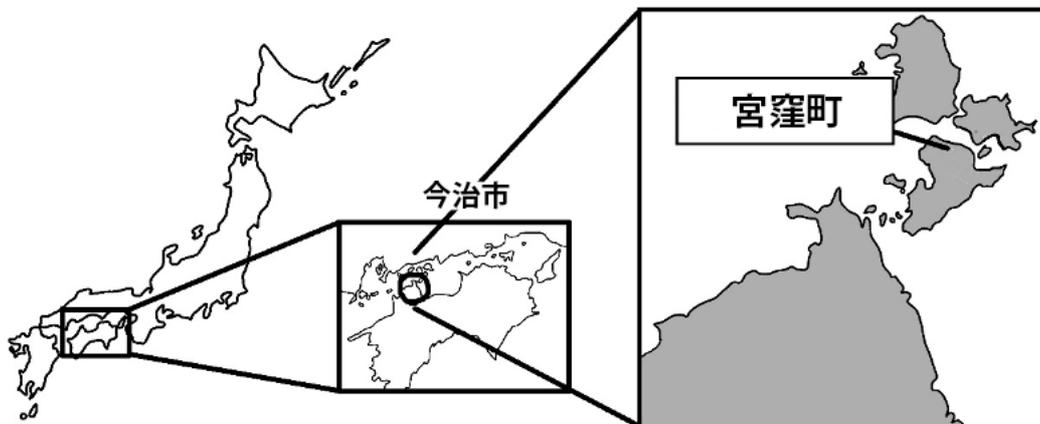


図2 宮窪町の位置

今治市の一部である宮窪町は、愛媛県大島の北部に位置している(図2参照)。宮窪手話は、長い間宮窪町の漁業の中心地であった宮窪港周辺の「浜」と呼ばれる地域で使われている。

日本の国勢調査(統計局 2016)によると、2016年の宮窪の住民は2,736人で、その中にろうの宮窪手話話者が20人(約0.66%)存在する。この地域のろう者住民の割合は、奄美大島での0.27%(大杉ほか Osugi et al. 1999)等、これまで日本で報告され数値よりも大幅に高いが、世界各地の地域共有手話の先行研究で報告されている数値よりは低いものである(注1)。様々な地域共有手話を比較した先行研究によれば、ろう住民の比率は、2~3%(カスターズ Kusters 2010, 5ページ)もしくは0.5~4%(ナイスト Nyst 2012, 559ページ)である。

宮窪手話は、宮窪の浜地域にある複数の世帯に暮らすろう者と聴者によって使われている。宮窪の外(今治市の中心部等)にも、宮窪手話を流暢に操る話者がごく少数存在する。著者(矢野)は、ほぼろう者によって構成される3つの家族の1つで生まれ育った。3家族のうち2つは親戚関係にあるが、3つ目の家族はそうではない。図3の黒丸は家族内のろう者を示し、白丸は聴者を示している。四角で丸を囲った記号は故人を表す。著者(図3の矢印)は、家族全員がろう者の家庭に生まれた。少なくとも3世代にわたり、家族はすべてろう者である。この地域には宮窪手話の話者であるろう者や聴者が他にも多数存在するが、この3つの家族は宮窪手話話者のコミュニティで中心的な役割を果たしてきた。

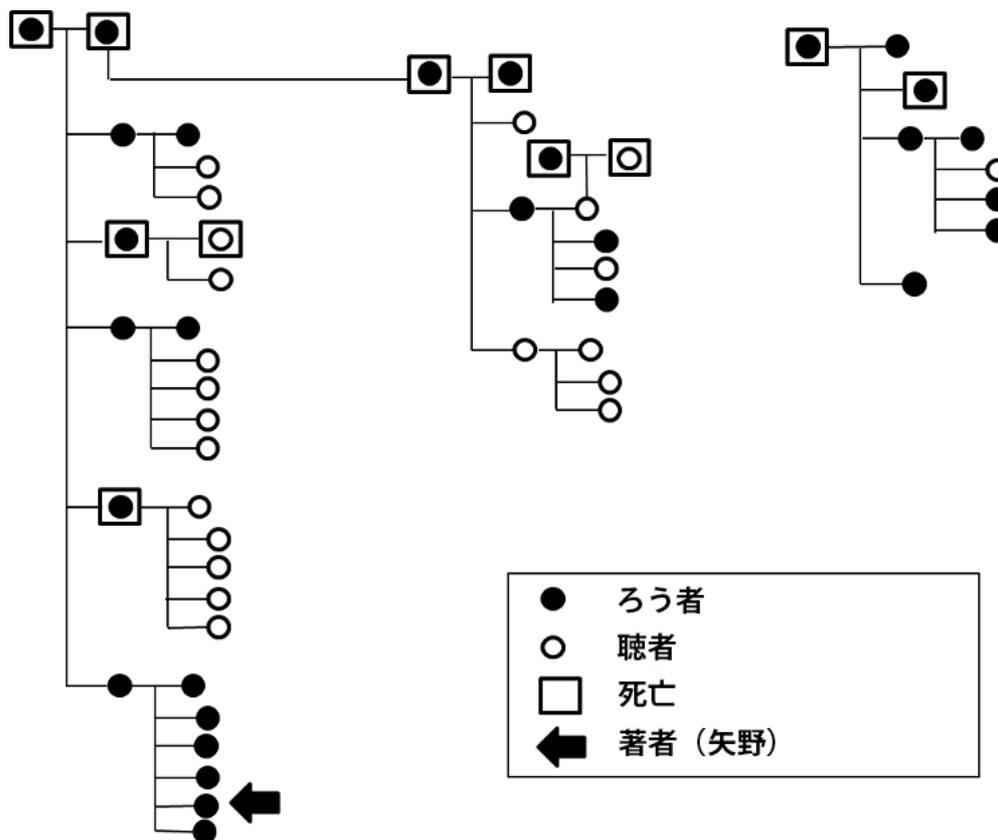


図3 宮窪の3つの家族の家系図

少なくとも3世代にわたって使われているという明白な事実を除けば、宮窪手話がいつ、どのように発生したかを示す資料や証言は現存しない。本稿で報告するデータは、著者(矢野)と著者の親戚・家族・家族の友人らによって提供されたものである。

2000年代初頭まで、宮窪手話はろう者と聴者の住民によって日常的に使用されていた。この詳細は後で述べる。著者や情報提供者が知る限り、宮窪手話の個人差は非常に少ない。松山市にあるろう学校に就学するろう児が増えるにつれ、宮窪手話と日本手話の接触は徐々に増えていった。宮窪手話話者の最も高齢の世代(80歳以上)はろう学校へ通ったことがなく、宮窪手話のみを使用する。その下の世代(40代から70代)はろう学校に入学したが、多くは教育課程の途中(小学校卒業前など)で就学を中止するなどの経緯があり、宮窪手話を主たる言語として使用している。最も若い世代(30代以下)の大半はろう学校の高等部を卒業し、宮窪手話と日本手話の両方に堪能なバイリンガル手話話者である。そのようなバイリンガル話者が島に帰省する際には、両親や祖父母には理解できないという理由で宮窪手話と日本手話の混用を避けている。しかし高

齢の話者がいない場所では、若い話者は宮窪手話と日本手話を混用したり、日本手話を使ったりする。

聴の情報提供者(2017年8月現在50代)からの聞き取り調査によると、聴の宮窪手話話者は、少なくとも50名はいると推定される。宮窪手話に堪能な聴者の多くは、ろう者がほとんどを占める家族の出身かその親戚であるが、それ以外の聴の住民も宮窪手話を使う。浜地域の聴の子どもたちは、保育園や幼稚園に入園した際にろうの子どもに出会うなどして、自然に宮窪手話を習得する。漁村で働く聴者とろう者は長らく漁業や水産加工の仕事で協働しており、宮窪手話もその環境で共有されていた。

しかし、2000年代初頭にこの地域で大きなインフラの変化があり、宮窪に住む人々の生活に甚大な影響があった。愛媛県大島と周辺の4つの島々が本州と高速道路の橋でつながれた結果、聴の宮窪手話話者が著しく減少した(矢野・松岡 Yano and Matsuoka 2017a)。聴の宮窪手話話者の船員が乗務していたフェリーは、橋の建設が完了するとともに廃止され、ろう者と聴者が交流する機会がなくなった。さらに深刻な出来事は、宮窪の聴者がその橋を利用して島外に通勤できるようになったことである。聴の住民たちは、ろう者とともに携わっていた漁業の仕事から離れていった。

宮窪町の社会生活も一変した。様々な島の人々が橋で結ばれた結果、聴の宮窪手話話者は島外出身者と結婚するようになったが、配偶者は宮窪手話を覚えようとしなかった。聴の手話話者たちは、手話がわからない配偶者を連れていくことができないため、夜間や休日にあるろう者との付き合いに参加しなくなっていった。デジタル技術の進歩も宮窪のコミュニティ文化に影響を与えた。若いろうの住民は、近所の聴者のところへ行って質問する代わりにインターネットを使って情報を集めるようになった。そのため、聴の住民が宮窪手話を学び、使う機会が失われていった。さらに、進学・就職・結婚などでろう者が島を離れるにつれて、宮窪出身の若いろう者の主要な言語は日本手話に変わりつつある。宮窪手話のモノリンガルろう者が減少し、その結果、宮窪手話は存続の危機にさらされている。

研究の方法

本研究の参加者は、宮窪手話を第一言語とする手話母語話者5名(45~80歳)である。著者の一人である矢野はろう者で、宮窪手話と日本手話のバイリンガル話者である。本研究の参加者は、矢野の家族・親戚・家族の友人である。参加者

は、コミュニティの一員(矢野)が行う記録保存プロジェクトを支援するため、快く協力を申し出てくれた。情報提供者たちは、地域の言語と文化を理解している調査者のことを信頼しており、自分たちの経験や知っていることを気軽に話すことができた。つまり通常なら時間のかかる対象地域の予備調査や、情報提供者との信頼関係を作ることに時間を費やす必要はなかったということである。自由会話・語り・インタビューはデジタル撮影され、著者(矢野)が書き起こしを行った。

数の表現

数の表現は手話類型論分野で広く研究されている基本語彙の一つである(ゼシャンほか Zeshan et al. 2013; 相良 Sagara 2014 等)。相良(Sagara 2014)は日本手話の数の表現に地域と年代による差異があると論じているが、宮窪手話の数の表現には、相良が収集した表現との明確な類似性は見られない。さらに、宮窪手話の数のシステム(数の表現の並べ方等)は、日本手話の数のシステムとも異なる(平ほか Taira et al 2015; 矢野ほか Yano et al 2014)。ここではまず、日本手話と宮窪手話の基本的な数の表現を示し、次に宮窪手話の数の表現のシステムについて論じる。また、金銭特有の数の表現があることについても述べる。

1~10の基数について、日本手話における手話表現は図4に示す通りである。

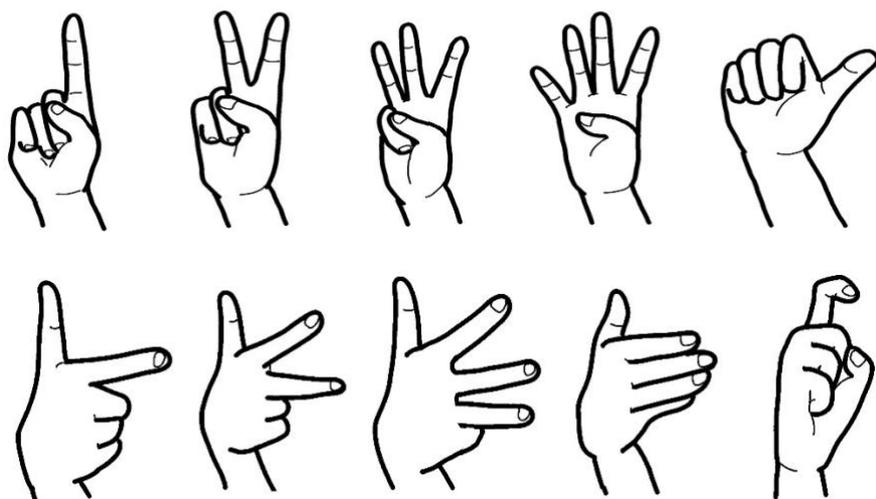


図4 日本手話/1-10/

図5に示すように、宮窪手話の数の表現のほとんどが、相良(2014)で報告された日本手話やその方言の数の基本表現とは音韻的に異なっている。

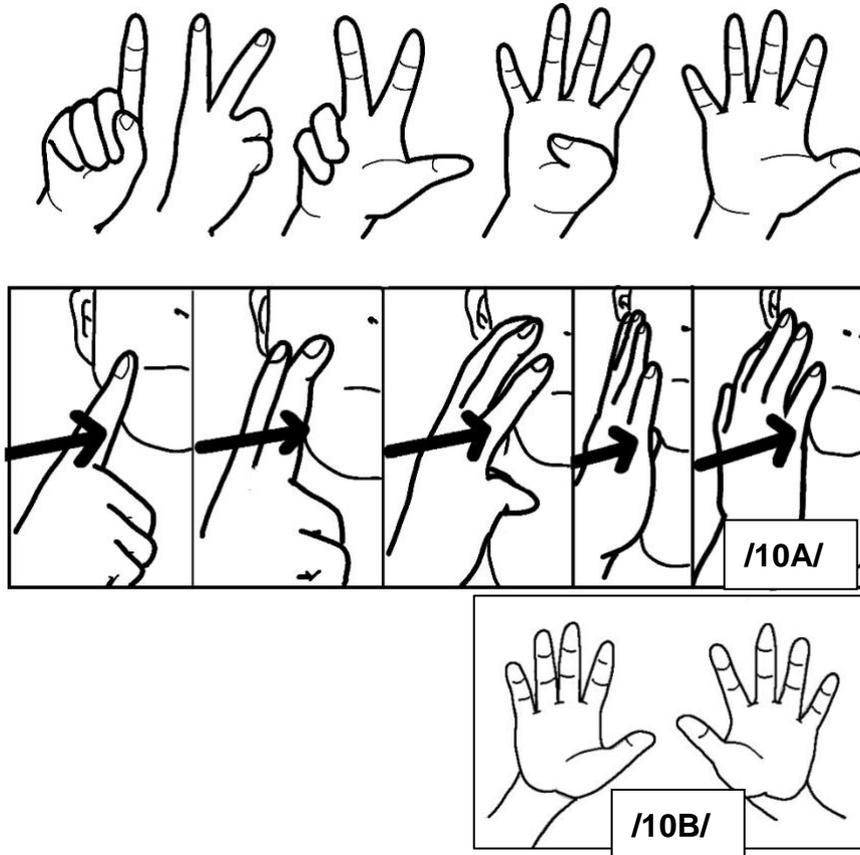


図5 宮窪手話/1-10/

宮窪手話の6～10の表現は、/6 /では1本の指、/7/では2本の指というように、話者が頬を軽く叩くことで表す。「10」の表現は2つあり(/10A/ と /10B/)、どちらも同じように使われる。「ゼロ」の手話表現はない。

宮窪手話と日本手話の違いは、単なる手話表現の違いにとどまらない。日本手話では、10や10,000などの単位を足したり掛けたりする方法が使われる。日本手話の10の倍数は、掛け算方式で作ることができる。例えば、基数詞(1～9)で伸ばした指を曲げる音韻変化によって10～90の表現が作られる(図6参照)。同じ手指表現に特定の動きを加えることで、100や1000の倍数を表現できる(日本手話の音韻変化によって作られる数の表現については、相良 Sagara 2014 に詳細な議論がある)。

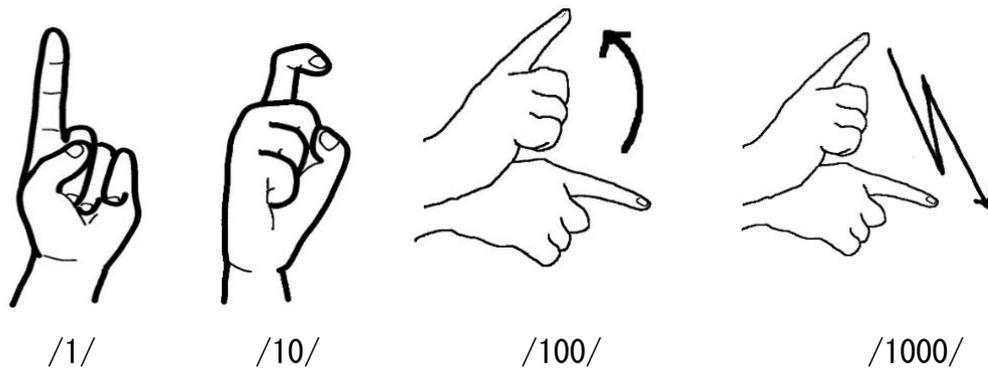


図6 日本手話の数の表現における音韻変化

日本手話において「14」は/10/の後に/4/を続けることで表現される(つまり10と4の足し算)。この際、2つの手話単語の動きが途切れなくつながることを除いて、特筆すべき音韻的な同化等はみられない。数の単位の掛け算で数字を表す日本手話の一例は「20,000」で、/2 /と/万/を続けることで表現される(図7)。

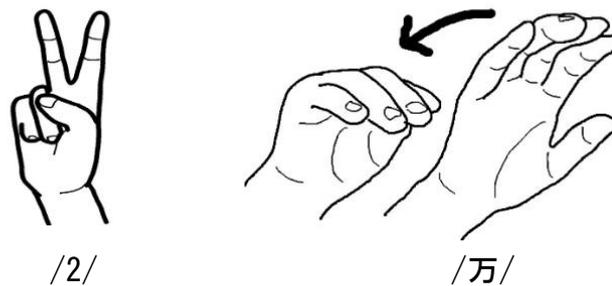


図7 日本手話の「20,000」を表す表現

一方、宮窪手話では、大きな数字を表現する際にデジタル型が用いられる(平ほか 2015)。数字は位ごとに左から右に順に表出される。たとえば図8のように、「23」は、/2/と/3/が連続する表現で表される。このシステムは、獲った魚の重さ・人や動物の年齢・日数などを表す際によく用いられる。

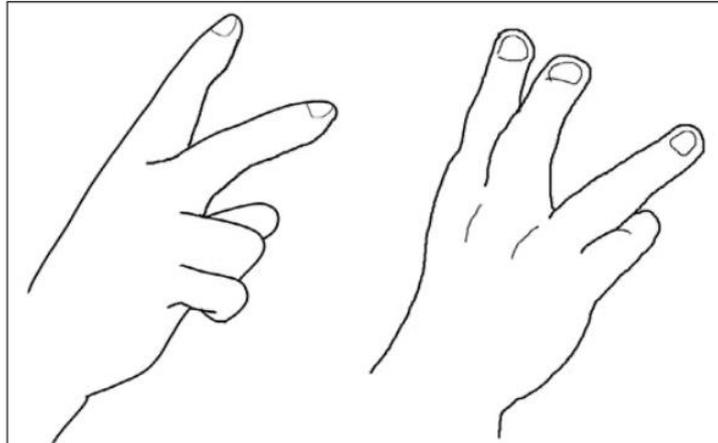


図8 宮窪手話で「23」を表すデジタル型表現

宮窪手話には、基数詞に加えて、金銭に使われる独特の数の表現がある。その表出方法には3種類ある。「10円」と「1000円」は、空中に漢字(「十」「千」)を空書きすることで表される。「100円」は親指を垂直方向に立てた拳で表される(語源は不明)。数字の単位と基数詞の語順は日本手話とは異なる(図9)。宮窪手話では、単位が数字の前に来るが(/100円//5/の順)、日本手話では数字の後に単位が続く(/5//万/) (注2)。

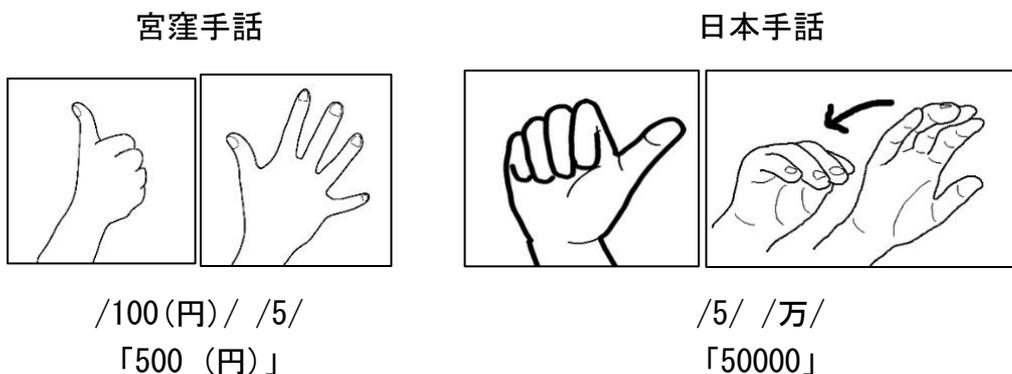


図9 宮窪手話と日本手話の数の単位と数字の語順

/1円/と/1万円/の手話は古い紙幣が元になっている。日本で使用されていた古い紙幣の写真を以下に示した。旧1円札は1889年から1958年まで(図10)、旧1万円札は1958年から1986年まで発行された(図12)。これらの紙幣のあごひげや口ひげを蓄えた人物の描写が手話表現に組み込まれている。

/1円/の手話表現を詳しく説明すると、手話話者は親指と人差し指で顎をこすり(あごひげを表す)、その後基数詞を表現する(図11参照)。基数詞の手のひら

の向きは図 5 の例と異なっているが、それは手話表現の表しやすさによるものと考えられる。



図 10 旧 1 円紙幣

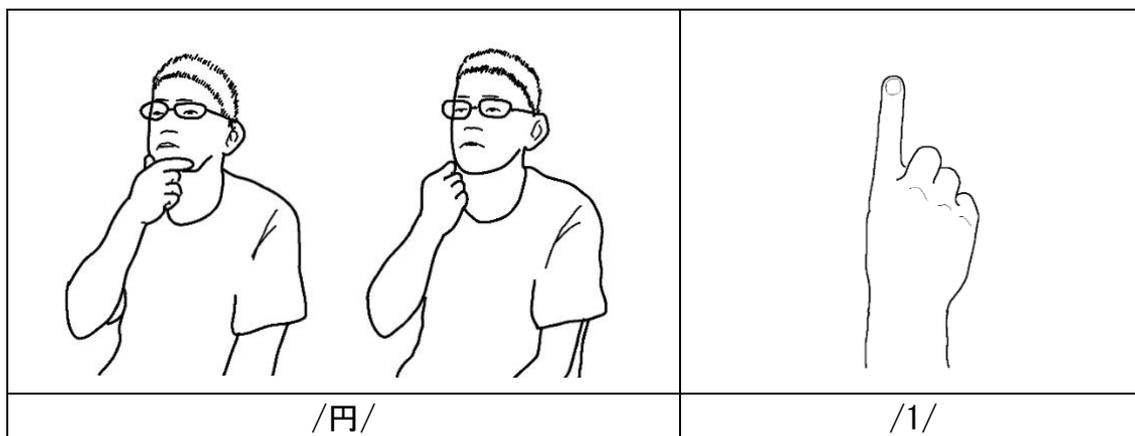


図 11 宮窪手話/1 円/

図 12 は旧 1 万円紙幣である。口ひげを蓄えた男性が描かれており、手話表現にその口ひげの描写が使われている。



図 12 旧 1 万円紙幣

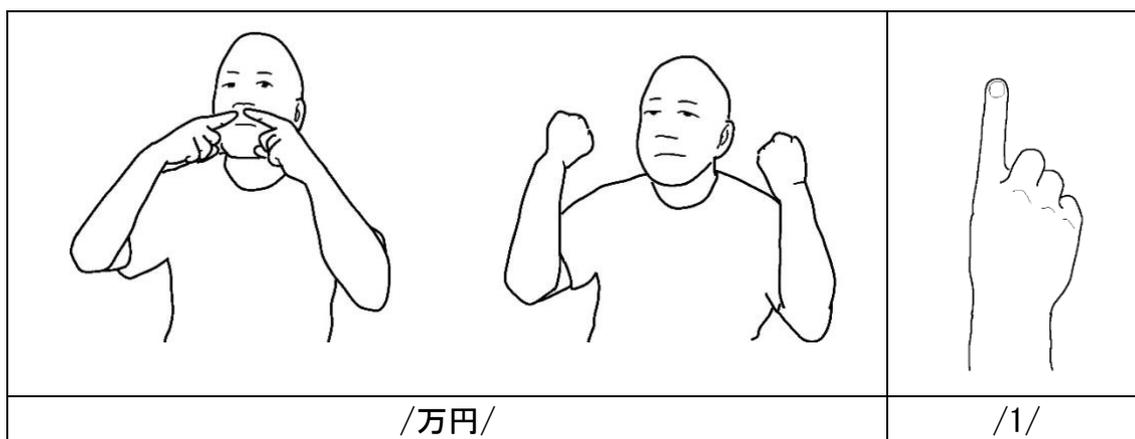


図 13 宮窪手話/1 万円/

図 13にあるように、手話話者は両手の人差し指を鼻の下にあて、顔の外側に向かって斜め下に引き下ろすとともに、人差し指が後ろを向くように手首をひねる。基数詞は/1 万円/の手話表現に続けて表出する必要がある。

金額を表す特有の数の手話表現は日本手話では使われていないが、他の手話言語には存在する。ゼシャンほか Zeshan et al. (2013)は(メキシコの)チカーノ手話では地域の貨幣のデザインを元にした手話が使われることを報告している。デボス de Vos (2012)も、金額を表す際に使われるカタコロクの数表現を報告している。また(パルFREイマン、Palfreyman 論文投稿済)のマカッサル地方で使われるインドネシア手話の変種にも、同じような手話表現があることが報告されている。

本節では、日本手話と宮窪手話の数の表現と数のシステムを解説した。宮窪手話の数の手話表現は、日本手話の表現とは音韻的に異なる。/1//2//4/はその例外だが、これらの数字は歴史的な関係の有無にかかわらず、多くの手話言語で一致することが多い(例：日本手話とアメリカ手話)。日本手話と宮窪手話では、数詞の使い方のシステムも異なっている。例えば、宮窪手話話者は大きな数字を表す際には主にデジタル型を使うが、(インドパキスタン手話とアリプール手話でも似たようなシステムがあることが報告されている；ゼシャンほか Zeshan et al, 2013, 364・383 ページ)、日本手話は指を曲げるなどの音韻的な変化で大きい数字が表される。宮窪手話では、10 や 100 の倍数を作る別の方法として、両手を叩く表現と基数詞を組み合わせるものもある。基数詞に組み合わせる両手を叩く表現のスピードを変えることで、異なる数の単位が示されるようであるが、情報提供者によると、両手を叩く表現はデジタル型ほど頻繁には使用されない。この表現については、今後の調査で明らかにしたい。最後に、宮

窪手話には、先行研究で報告されている他の手話言語同様に、金銭に関する独特の数の表現がある。1880年代に発行された紙幣のデザインを用いる数の表現があるという事実から、その頃までには宮窪手話が発生していた可能性がうかがえる(査読者による指摘)。

体を基点として使用するタイムライン

様々な種類のタイムラインは、手話においても、また発話と共起するジェスチャーでも観察されている。手話話者は、空間に設定された「線」を用いて時間を表す(エンゲベルグペデルソン Engberg-Pedersen 1993 のデンマーク手話の例、カベザペレイロとフェルナンデズソネイラ Cabeza Pereiro and Fernández Soneira 2004 のスペイン手話の例、ナイスト Nyst 2007 のアダモロベ手話の例、デボス de Vos 2012 のカタコロクの例)。タイムラインは、発話と共起するジェスチャー (co-speech gestures) でも観察されている(ヌーネスとスウィーツァー Nuñez and Sweetser 2006; ボロディツキーとギャビー Boroditsky and Gaby 2010)。宮窪手話や日本手話にもタイムラインが使われている。ここでは、手話話者が自分の体を基点として使用する「直示的な」タイムライン(エンゲベルグペデルソン Engberg-Pedersen 1993)を取り上げる。

この種のタイムラインの例としてよく知られているのは、話者の背後が過去を表し、前方が未来を示す空間使用である(注3)。図14にあるように、日本手話のタイムラインは話者の背後から始まり、前方へ進む(岡と赤堀 Oka and Akahori 2011; 松岡 Matsuoka 2015)。



図14 日本手話のタイムライン

/昨日/、/今日/、/明日/などの時に関する表現は、タイムラインの「過去」「現在」「未来」に対応した位置で表現される(図 15)。



/昨日/

/今日/

/明日/

図 15 日本手話における「昨日」「今日」「明日」の手話

宮窪手話のタイムラインは話者の利き手側から始まり、話者の体の中心に向かって進む(図 16)。この直示的なタイムラインは、宮窪手話の話者が過去の出来事について話す際に多く用いられる(例: 4年前に生まれた子どもの話題)。



図 16 宮窪手話のタイムライン

宮窪手話の「昨日」と「今日」も、上記のタイムライン上で表現される(図 17)。
/昨日/では話者は自分の右側を、/今日/では自分の正面の空間を指さす。



/昨日/



/今日/

図 17 宮窪手話/昨日//今日/

日本手話とは異なり、宮窪手話では未来を表す空間はタイムライン上に含まれない。図 18 にあるように、宮窪手話では「一日後」（明日）は/考える/または/寝る/という手話で表現される（注 4）。



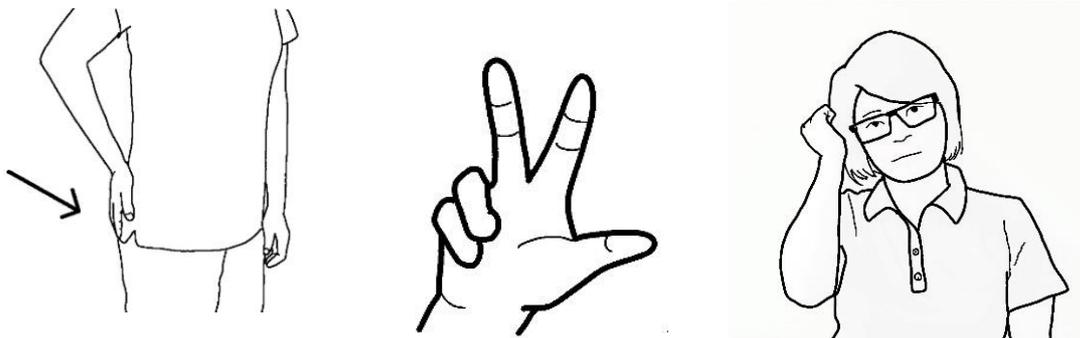
/考える/ または/明日/



/寝る/ または /明日/

図 18 宮窪手話における「明日」の表現

それに加えて、/寝る/と/あと/の手話を基数詞と組み合わせることで、未来の時点を表現することができる。/あと/は、話者の利き手を同側の腰のあたりにあてて表す。「3日後」の手話表現は、3つの手話の組み合わせで表すことができる（図 19）。この文脈では/3/と/寝る/の語順は重要ではなく、入れ替えてもよい。



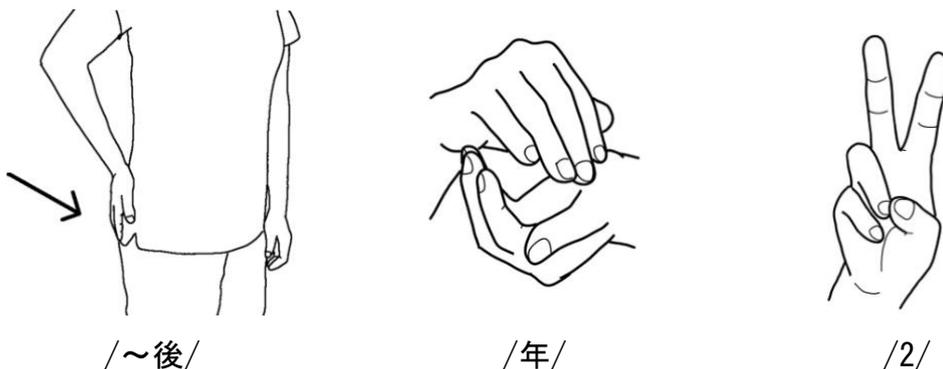
/～後/

/3/

/寝る/

図 19 宮窪手話における「3日後」の表現

図 20 にある「今から 2 年後」の表現は、/あと//年//2/という 3 つの手話表現を続けて表出することで表現される。「年」の手話表現は、日本で新年のお祝いで食べる伝統的な食べ物である丸い餅の形を示している。



/～後/

/年/

/2/

図 20 宮窪手話における「2年後」の表現

/あと/の手話表現から、手話話者の背後の空間に未来の意味があるように見えるかもしれないが、実際はそうではない。/明日/などの手話が話者の背後で表現されることはない。/あと/の手話表現は、情報提供者の説明にあった比喻(二艘の船が縦列で進む際、後ろの船が前の船の船尾につく)に基づく船尾の形に由来しており、特定の時間を意味する空間位置とは無関係であると思われる。宮窪手話には「週」や「月」を表す手話単語はない。/寝る/と基数詞/7/を続けて表現することで、7日間(1週間)を表す。

本節では、宮窪手話にみられる、話者の体を基点として使うタイムラインについて論じた。カタコロクでも同様の観察があることから(デボス deVos 2012)、「未来」を指す語彙的な表現がないことは、地域共有手話共通の特徴である可能性が考えられる。それに加えて、宮窪手話には太陽の位置を基にする別の種類のタイムラインがある。次節で、この天体タイムラインの特徴を論じることにする。

宮窪手話の天体タイムライン

宮窪手話のもう一つの珍しい特徴は、天体タイムラインの使用である(注5)。東から西へ移動する太陽の実際の位置に対応した天体タイムラインは、カタコロク(デボス de Vos 2012, 380-81)を含む他の地域共有手話や、ブラジル先住民の音声言語話者が話しながら用いる視覚的補助手段(フロイド Floyd 2016)にも見られる。

カタコロク(デボス de Vos 2012)の場合とは異なり、宮窪手話の天体タイムラインでは指さしは使われない。代わりに、タイムライン上の利き手の位置を用いて、特定の時間を表現する。/朝/の手話表現が、タイムラインの起点近くに位置していれば、朝の早い時間であることを示し、同じ手話表現が話者の額近くにあれば、午前中でも昼に近い時間となる。午後や夜についても同様である。正午の場合のみ、/正午/という手話表現が話者の額の辺りで表出される。タイムラインがどう進むかに関わらず「正午」を示す手話表現は常に額に位置するため、この表現が指さしの一種とは考えにくい。両手型を図21に示す。



/朝/ または /夜/の手型



/正午/の手型

図21 宮窪手話の天体タイムラインで使われる手型

情報提供者が示した宮窪手話の天体タイムラインの3つの例を、図22に示した。これらの例は全て「朝—昼—夜」を意味する。話者はタイムラインに沿って手話表現の位置を変える。天体タイムラインは太陽の実際の位置に合致するた

め、話者から見た天体タイムラインの位置も様々に変化し得る。図 22 の最初(上段)の天体タイムラインは、話者の体の正面で右から左へと進む。2 番目(中段)と 3 番目(下段)の例では、話者が別の方角を向いているために体に対するタイムラインの相対的な位置が変化している。2つ目の例では、タイムラインが手話話者の左側から始まり、右後ろに向かって斜めに進んでいる。最後の例では、タイムラインが話者の右側の空間で、前から後ろへ進んでいる。手話話者は手を後ろに動かすために必要に応じて体の向きを変えることもある。フロイド Floyd (2016, 43 ページ)の研究でも、ニエエンガトゥ語話者が使う天体タイムラインでも同じように話者が体の向きを変える例が観察されている。



図 22 宮窪手話における天体タイムライン

宮窪手話の天体タイムラインで時間帯を表すことはできないため「午前中」や「午後」の手話単語は存在しない。それでも天体タイムラインが「線」として用いられていることは/一日中/という手話表現からうかがえる(図 23 参照)。この表現では、図 21 にある手型のどちらかが天体タイムラインに沿って動かされる。この場合は「正午」の手話表現は使われない。



図 23 宮窪手話/一日中/

手話話者が建物の中にいる場合、タイムラインの位置に制限はない。手を(額のあたりに向かって)上方向へ動かすことは午前中の任意の時間を表し、(額のあたりから)下への動きは午後から夜を表す。手話話者が屋外にいる場合は、天

体タイムラインは実際の日の出と日の入りの方角に合わせなければならない。曇りや雨で太陽が見えなくても、手話話者は太陽の位置をおおまかに推測できる。それが可能な理由は、宮窪手話が漁船で行くことができる範囲内で使われる、地域に根付いた手話言語であり、話者が地形をよく把握しているからである。

まとめると、宮窪手話の話者は、話者の体を基点としたタイムラインと天体タイムラインの2種を用いる。フロイド Floyd (2016, 38 ページ)は、天体タイムラインはアマゾンの赤道直下のコミュニティに典型的に見られ「(太陽の弧の位置)が共有知識として利用しやすいことがその理由である。それよりも北や南に位置する地域では(太陽の)軌跡の位置が季節で変化するため、同じような表現が生じにくいと考えられる」と述べている。日本の中央部に位置する宮窪地区での天体タイムラインの使用事例は、天体タイムラインが特定の地域に限定されたものではなく、屋外の決まった場所で太陽の位置を適宜確認する必要のある職業(農業や漁業)に携わる人々の間で発展してきた可能性を示唆している。

おわりに

本研究では、数の表現とタイムラインを中心に、宮窪手話の言語的な記述を提示した。宮窪手話における基数詞のほとんどは、日本手話の表現とは音韻的に異なっている。それに加えて、宮窪手話で使われる大きな数字を表すデジタル型の数詞システムも、日本手話の数詞システムとは著しく異なるものである(注6)。時間の流れに関する表現として、宮窪手話の話者は2種のタイムラインを使用する。1つは話者の体を基点とする部分的なタイムラインで、未来は含まれていない。2つ目は太陽の動きに基づいた天体タイムラインである。宮窪手話は2種のタイムラインを用いる言語の存在を示す新たな事例であり、地域共有手話を持つ性質の研究に大きく貢献するものである。

謝辞

宮窪手話の情報提供者に謝意を表したい。加えて、マリー・コッポラ (Marie Coppola)、キャサリン・デイビッドソン (Kathryn Davidson)、コニー・デボス (Connie de Vos)、ディアナ・ギャグニー (Deanna Gagne)、ダイアン・リロマーティン (Diane Lillo-Martin) 各氏からは、長期にわたり助言と激励をいただいた。査読者の方々からも本稿の初期段階から貴重なコメントが寄せられた。TISLR 12・東京外国語大学・ハーバード大学・コネチカット大学での研究会の参加者の皆様からも、示唆に富むコメントが得られた。ジャスティ

ナ・ホー(Justina Ho)、ジョン・ヘルウィグ(John Helwig)両氏には、英文校正でご支援をいただいた。中西未友樹氏には、写真のイラスト化をご担当いただいた。本研究は科研費(JP26284061 研究代表者 松岡和美)の支援を受けた。すべての文責は著者にある。

注

1. 厚生労働省の国勢調査(2008)によると、(手話を使うか否かにかかわらず)ろう・難聴者の人口は、2006年現在で343,000人である。これは日本の総人口の0.268%に値する(統計局2006)。この数値は、カスターズ Kusters(2010)で報告された、西洋で生まれたろう児の割合(0.1-0.2%)に近い。
2. 査読者が指摘する通り、宮窪手話の語順を「100円を5つ」と解釈することも可能である。
3. 同様のパターンが音声言語の比喻においても観察されている(トラウゴット Traugot 1978; レイコフ Lakoff 1993; フィルモア Fillmore 1997)。
4. 他の地域共有手話においても、今日の前または後の日を表す際に「寝る」の手話表現が使用される傾向がある。カクマス Kakumasu(1968, 278ページ)におけるブラジルのウルブ(Urubu)手話の記述によると「過去時制は過ぎ去った夜の数を示す指に『寝る』の手話をつけることで、詳しく表すことができる」。また「明日」の表現については、手話話者が「太陽を現在の位置から日没の位置へ指で示した後、『寝る』の手話を表し、その次に新しい日が始まるという意味の手話表現を用いる」とも報告している。
5. このトピックを研究対象に含めることはコニー・デボス(Connie de Vos)氏に提案されたものである。
6. 相良 Sagara(2014, 138ページ)は(2018年など)西暦年を表す際には日本手話でもデジタル型が使われることを指摘している。

参考文献

Boroditsky, L., and A. Gaby. 2010. Remembrances of Times East: Absolute Spatial Representations of Time in an Australian Aboriginal Community. *Psychological Science* 21(11): 1635-39.

- Branson, J., D. Miller, and I. G. Marsaja. 1996. Everyone Here Speaks Sign Language, Too: A Deaf Village in Bali, Indonesia. In *Multicultural Aspects of Sociolinguistics in Deaf Communities*, ed. C. Lucas, 39-57. Washington, DC: Gallaudet University Press.
- Cabeza Pereiro, C., and A. Fernández Soneira. 2004. The Expression of Time in Spanish Sign Language (LSE). *Sign Language & Linguistics* 7(1): 63-82.
- De Vos, C. 2012. Sign-Spatiality in Kata Kolok: How a Village Sign Language in Bali Inscribes Its Signing Space. PhD diss., Radboud University, Nijmegen.
- , and U. Zeshan. 2012. Introduction: Demographic, Sociocultural, and Linguistic Variation across Rural Signing Communities. In *Sign Languages in Village Communities*, ed. U. Zeshan and C. de Vos, 2-23. Berlin: Walter de Gruyter.
- Engberg-Pedersen, E. 1993. *Space in Danish Sign Language: The Meaning and Morphosyntactic Use of Space in a Visual Language*. Hamburg: Signum-Verlag.
- Fillmore, C. J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford, CA: CSLI publications.
- Floyd, S. 2016. Modally Hybrid Grammar?: Celestial Pointing for Time-of-Day Reference in Nheengatú. *Language* 92(1): 31-64.
- Groce, N. E. 1985. *Everyone Here Spoke Sign Language: Hereditary Deafness on Martha's Vineyard*. London: Harvard University Press.
- Ichida, Y. 2010. Introduction to Japanese Sign Language: Iconicity in Language. In *Studies in Language Sciences* 9, ed. M. Hirakawa, S. Inagaki, S. Arita, Y. G. Butler, K. Horie, E. Hauser, Y. Shirai, and J. Tsubakita, 3-32. Tokyo: Kurosio Publishers.
- , Y. Namba, M. Fushihara, M. Miyake, and M. Yoshii. 2001. Nihon shuwa bogo washa jinko tokei no kokoromi [A Preliminary Statistics of the Population of the Native Signers of Japanese Sign Language]. Paper presented in the 27th annual meeting of Japanese Association for Sign Language Studies. Kanazawa University, Kanazawa.
- Kakumasu, J. 1968. Urubu Sign Language. *International Journal of American Linguistics* 34(4): 275-81.
- Kanda, K., T. Kimura, and D. Hara. 2008. Nihon no rosha jinko no suihei [An Estimate of the Size of Deaf Population in Japan]. Paper presented

at the 34th annual meeting of Japanese Association for Sign Language Studies. Kobe Academic Park Association for the Promotion of Inter-University Research and Exchange UNITY Academic Community Hall, Kobe.

Kosei Rodo Sho (Shakai Engokyoku Shogai Hoken Fukushi-bu Kikaku-ka) [Ministry of Health (Labour and Welfare, Social Welfare and War Victim's Relief Bureau Department of Health and Welfare for Persons with Disabilities Policy Planning Division)]. 2008. Heisei 18 nenshintai shogaiji/sha jittai chosa kekka [Survey on Persons with Physical Disability in 2006]. www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shintai/06/dl/01_0001.pdf.

Kuschel, R. 1973. The Silent Inventor: The Creation of a Sign Language by the Only Deaf-Mute on a Polynesian Island. *Sign Language Studies* 3(1): 1-27.

Kusters, A. 2010. Deaf Utopias? Reviewing the Sociocultural Literature on the World's "Martha's Vineyard Situations." *Journal of Deaf Studies and Deaf Education* 15(1): 3-16.

Lakoff, G. 1993. The Contemporary Theory of Metaphor. In *Metaphor and Thought*, 2nd ed., ed. A. Ortony, 202-51. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Matsuoka, K. 2015. *Nihon shuwa de manabu shuwa gengogaku no kiso* [The Foundation of Sign Language Linguistics with Special References to Japanese Sign Language]. Tokyo: Kurosio Publishers.

Núñez, R. E., and E. Sweetser. 2006. With the Future behind Them: Convergent Evidence from Aymara Language and Gesture in the Crosslinguistic Comparison of Spatial Construals of Time. *Cognitive Science* 30(3): 401-50.

Nyst, V. 2007. A Descriptive Analysis of Adamorobe Sign Language (Ghana). PhD diss., University of Amsterdam.

—. 2012. Shared Sign Languages. In *Sign Language: An International Handbook*, ed. R. Pfau, S. Steinbach, and B. Woll, 552-74. Berlin: Walter de Gruyter.

Oka, N., and H. Akahori. 2011. *Nihon shuwa no shikumi* [Structure of Japanese Sign Language]. Tokyo: Taishukan.

Osugi, Y., T. Supalla, and R. Webb. 1999. The Use of Word Elicitation to Identify Distinctive Gestural Systems on Amami Island. *Sign Language & Linguistics* 1(2): 87-112.

- Padden, C., I. Meir, M. Aronoff, and W. Sandler. 2010. The Grammar of Space in Two New Sign Languages. In *Sign Languages*, ed. D. Brentari, 570-92. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Palfreyman, N. Submitted. Variation and Change in the Expression of Numerals across Urban Sign Language Varieties in Indonesia.
- Perniss, P., R. Pfau, and M. Steinbach, eds. 2007. *Visible Variation: Comparative Studies on Sign Language Structure*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Sagara, K. 2014. The Numeral System of Japanese Sign Language from a Cross-Linguistic Perspective. MA Thesis, University of Central Lancashire.
- Sandler, W., I. Meir, C. Padden, and M. Aronoff. 2005. The Emergence of Grammar: Systematic Structure in a New Language. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 102(7): 2661-65.
- , I. Meir, S. Dachkovsky, C. Padden, and M. Aronoff. 2011. The Emergence of Complexity in Prosody and Syntax. *Lingua* 121(13): 2014-33.
- Statistics Bureau. 2006. Ministry of Internal Affairs and Communications website. <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2006np/index.htm>.
- Taira, E., U. Yano, and K. Matsuoka. 2015. Miyakubo shuwa no kazu ni kansuru hyogen – nihon ni okeru kiki gengo [An Endangered Language in Japan – Numerical Expressions of Miyakubo Sign Language]. Oral presentation of the 35th Annual Meeting of Japanese Association of Sociolinguistic Sciences. Tokyo Women's Christian University.
- Traugott, E. 1978. On the Expression of Spatio-Temporal Relations in Language. In *Universals of Human Language, Vol 3: Word Structure*, ed. J. H. Greenberg, 369-400. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Washabaugh, W., J. C. Woodward, and S. DeSantis. 1978. Providence Island Sign: A Context-Dependent Language. *Anthropological Linguistics* 20(3): 95-109.
- Yano, U., and K. Matsuoka. 2016. Number, Timeline, and Spatial Expressions in a Village Sign Language in Japan: A Preliminary Study of Ehime-Oshima Island Sign Language. An oral presentation at the 12th International Conference on Theoretical Issues in Sign Language Research (TISLR12). La Trobe University, Melbourne.
- , and K. Matsuoka. 2017a. Ehime-ken Oshima Miyakubo-cho no shuwa: airand sign [Island Signs: The Sign Language of Miyakubo in Ehime

Prefecture]. *Science Journal KAGAKU* [Science] 87(5): 415-417. Translated into English and published on <http://www.japanpolicyforum.jp/archives/society/pt20170919090630.html>.

—, and K. Matsuoka. 2017b. Ehime-ken oshima miyakubo chiku no sonraku shuwa (chiiki kyoyu shuwa) ni okeru 2shurui no taimurain [Two Types of Timelines in the Village (Shared) Sign Language in Miyakubo District of Ehime-Oshima Island]. A poster presentation at the 155th bi-annual meeting of the Linguistic Society of Japan. Ritsumeikan University.

—, K. Matsuoka, and E. Taira. 2014. Ehime-ken Oshima no birejji sain (shuwa hogen) ni okeru kazu to toki no hyogen [Numerals and Time Expressions in the Village Sign (a Signed Dialect) in Ehime-ken Oshima Island]. A poster presentation at the 149th Meeting of the Linguistic Society of Japan. Ehime University.

Zeshan, U., G. E. E. Delgado, H. Dikyuva, S. Panda, and C. de Vos. 2013. Cardinal Numerals in Rural Sign Languages: Approaching Cross-Modal Typology. *Linguistic Typology* 17: 357-96.

—, and C. de Vos, eds. 2012. *Sign Languages in Village Communities*. Berlin: Walter de Gruyter,